早稲田大学大学院教育学研究科紀要　第二十九号　二〇一九年三月

『源氏物語』の贈答歌試論

―六条御息所・朝顔斎院・玉鬘など―

田渕　句美子

『源氏物語』で、光源氏は、時に女性に対して高慢で無礼な物言いをしたり、傲慢な趣の贈答歌を詠むさまが描かれている。そのようなことは、高貴な女性に対してもあるのだろうか。贈答歌の表現には、身分関係が深く関わっていないだろうか。三つの場面を中心に検討し、あわせていくつかの詠歌についても考えてみたい。

一　葵巻の六条御息所との贈答

葵巻で、光源氏の正妻葵上が突然に逝去し、悲嘆に沈む源氏のもとへ、六条御息所からの弔いの消息が届く場面を、次に掲げる。

「聞こえぬほどは、思し知るらむや。

人の世をあはれと聞くも露けきにおくるる袖を思ひこそやれ

ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ。」

とあり。常よりも優にも書いたまへるかな、とさすがに置きがたう見給ふものから、つれなの御とぶらひやと心憂し。（中略）わざとある御返りなくは、情けなくやとて、紫の鈍める紙に、

「こよなうほど経はべりにけるを、思ひたまへおこたらずながら、つつましきほどは、さらば思し知るらむや、とてなむ。

とまる身も消えしも同じ露の世に心おくらむ程ぞはかなき

かつは思し消ちてよかし。御覧ぜずもやとて、これにも。」

と聞こえたまへり。

里におはするほどなりければ、忍びて見たまひて、ほのめかしたまへる気色を心の鬼にしるく見たまひて、さればよ、と思すもいといみじ。なほいと限りなき身の憂さなりけり。(1)

（葵巻）

二人の贈答歌をみると、六条御息所が「おくるる袖を思ひこそやれ」と言ったのに対して、光源氏の返歌は、涙に濡れる袖（人）の映像を消し去り、悲しみの共有を拒否する。また「とまる身も」と「消えしも」とを並立・連続して上句に示し、夫婦としての二人の絆を強調し

ているかのようであり、生者も死者もいずれは同じことである、と言う。そして、そして散乱する「消ゆ」「露」「置く」、それにまつわる「露の世」「はかなき」、これらで形成される消失のイメージの中に、「身」と対比するようにして「心」という語をあえて挿入しており、人の生死ははかない露のようなこの世のことに過ぎず、その世に心を残すこともはかないことである、と返した。この源氏の歌は、御息所の弔問の歌のことばを受け、表面上は丁寧な返しながら、心理的にそれに寄り添わず、亡き妻との絆をそれとなく強調した上で、はかない人の世の運命に転換し、そしてひそかに御息所を非難する「心おく」という言葉をしのばせた、巧みな返歌であると言えよう。

さて、ここで問題としたいのは、「かつは思し消ちてよかし」の部分である。現在一般に用いられている代表的な注釈書では、「お恨みをさりながら、どうか一方ではつとめてお忘れくださいまし」（新編日本古典文学全集）、「（思いつめるのも当然だが）どうか一方では、その執心を捨てておしまいなさいまし」（新日本古典文学大系）、「かたがた、あなたもその執着（私の身の上を思いやって下さること）を、おさまし下さいませ」（新潮日本古典集成）、「やはり、一方ではご執着をお忘れください」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識9 葵』至文堂）と訳され、いずれも自分（光源氏）への執着を捨てて忘れよ、と御息所に言った意味に訳されている。これらは、たとえば『源氏物語玉の小櫛』で「恨めしくはおぼすとも、かつはその恨みをおぼしけちて、思ひいれ給ふなと也」とする解釈と同様である。しかし一方、『河海抄』では、「かつはおぼしけちてよかし。御らんぜずもやとて」に対する注として、「此程のをこたりを思ひけち給へとあるか。神事なれは、穢所の文をもよも御らんぜじとうたがふ也」[2]と注しており、源氏が自分の無沙汰をお気にかけないでください、と述べているという別の解釈を示している。[3]また『花鳥余情』は、「なに事もあだなる世に、さのみなおぼしいりそといふは、物の気に入給ふをほのめかしたる詞也」[4]と注する。

私見では、「思し消ちてよかし」は、裏側では、諸注が述べるように、自分（光源氏）への執着を捨てよという意味をほのめかしていることは確かであろう。しかし表の意味としては、あくまでも六条御息所の歌の下句にある「おくるる袖を思ひこそやれ」、そして「ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」という慰めの見舞を受けた言葉であり、どうぞお気にかけないでください、私の悲しみを思いやってくださるお気持ちはありがたいですがお忘れください、といった意味に解するべきではないか。注釈書の中では、新潮日本古典集成は、前掲のようにそれを（　）内に記しており、それが表の意味であることを示しているようである。

『源氏物語』の中でほかに「思ひ消つ」は八例、「おぼし消つ」は二例あるが、①見下す、ないがしろにする、②気に懸けない、③思いを抑えて出さない、思いを消す、等の意で使われている。①の例は、「人の思ひ消ち、なきものにもてなすさまなりし御禊の後」（葵巻）と「こよなく思ひ消ちたりし人」（藤裏葉巻）は、いずれも葵上や左大臣家

側が六条御息所を見下していたことをさす。②の例は、「事にもあらず思し消てもてなしたまふなるべし」（桐壺巻）は、弘徽殿女御が帝の深い嘆きを気にかけずに振る舞うさまをさす。執着や妄執を捨てて忘れるという意味のものはなく、近いものとしては「今日はこの御ことも思ひ消ちて」（賢木巻）と、「よろづのことすさびにこそあれ、と思ひ消たれたまふ」（澪標巻）が、思いを抑える・うち消す意である。「思し消ちてよかし」も、思いを抑える・うち消すという意味に近いと思われ、③に該当する。

源氏は御息所に何かを言うときには敬語を用いて丁寧に語っており、たとえば、懐妊中の葵上に付き添わねばならないことを理解してほしいと御息所に言う時にも、源氏は「…よろづを思しのどめたる御心ならば、いとうれしうなむ」（葵巻）と、丁寧に頼んでいる。また、消息は誰に見られるかわからないものであり、それゆえ表現に十分注意しなければならない、とは、源氏自身が言っていることである（若菜下巻）。消息で、命令形を用いて御息所に、表側では、自分への執着を絶てというようなことは絶対に言わないであろう。もし周囲の女房などがこの手紙を見た時にも、不自然に思わないような言葉・意味になっているはずである。[5]

『源氏物語』本文ではこの後、「ほのめかし給へる気色を心の鬼にしるく見たまひて、さればよと思すもいといみじ」とあるように、六条御息所は源氏が暗にほのめかした言葉、「心置く」「思し消ちてよかし」の裏側の意味を的確に理解し、御息所が怨霊となったことを源氏が知っていることを悟って、深く苦しむ。こうした後の文脈があるゆえに、当該部分は諸注釈書に書かれているように訳されているが、当該部分は二重の意味を持っていることが重要であり、表の意味としてはあくまでも、歌意を受けて、「この世ははかないものです。ご心配はありがたいですが、どうぞお気にかけないで下さい」という挨拶であると示すべきではないだろうか。

こんなことは言うまでもないことかもしれず、無駄な論かもしれないが、源氏が高貴な六条御息所に対して、誰に見られるかわからない消息文で、命令形を用いて自分への執着を正面から「思し消ちてよかし」と言うはずはなく、あくまでもそれは、裏側に巧妙に隠された暗示なのである。

二　朝顔巻の前斎院との贈答―朝顔をめぐって―

朝顔巻の光源氏と前斎院との贈答歌は、解釈に問題があり、疑問が呈されている部分である。その場面の本文を掲げる。

とく御格子まゐらせたまひて、朝霧をながめたまふ。枯れたる花どものなかに、朝顔のこれかれに這ひまつはれて、あるかなきかに咲きて、匂ひもことに変れるを、折らせたまひて奉れたまふ。

「けざやかなりし御もてなしに、人わろき心地しはべりて、後ろ手もいとどいかが御覧じけむ、とねたく。されど、

見し折のつゆ忘られぬ朝顔の花の盛りは過ぎやしぬらむ

年ごろのつもりも、あはれとばかりは、さりとも思し知るらむや、となむ、かつは。」

など聞こえたまへり。大人びたる御文の心ばへに、おぼつかなからむも、見知らぬやうにやと思し、人々も御硯とりまかなひて聞こゆれば、

「秋はてて霧の籬にむすぼほれあるかなきかにうつる朝顔
似つかはしき御よそへにつけても、露けく。」

とのみあるは、何のをかしきふしもなきを、いかなるにか、置きがたく御覧ずめり。青鈍の紙の、なよびかなる墨つきはしもをかしく見ゆめり。

光源氏の「見し折の…」という贈歌の解釈は、物語中で問題となる和歌の一つである。一般に通行する注釈書の訳・注などを列挙する。

昔お目にかかったときのことが今もって少しも忘れられない朝顔の花の盛り―あなたの盛りのお美しさは過ぎておしまいになったのでしょうか。
（新編日本古典文学全集）

かつて見た時のことが少しも忘れられない朝顔の花の盛り―あなたの盛りの美しさはもう過ぎてしまっているだろうか、の意。
（新日本古典文学大系）

昔拝見した折のことが一向に忘れられません美しい朝顔（あなたのお顔）の盛りはもう過ぎたことでしょうか。／「朝顔」は女の寝起きの顔の意を掛ける。
（新潮日本古典集成）

昔見た時のことが少しも忘れられない朝顔の花の盛りは、そしてあなたの美しさの盛りは過ぎてしまったのでしょうか。／「朝顔」は女性の朝の寝起きの素顔を連想させ、「見し」とともに情交関係を暗示する。
（源氏物語の鑑賞と基礎知識33）

以上の注釈書ではすべて、「朝顔の花の盛りは過ぎやしぬらむ」が、間接的にせよ朝顔姫君の容貌の衰えを言うものと解しており、それが通説となっている。[6] 通説のように解釈した場合、源氏の歌は非常に無礼な物言いとなる。[7] そのような失礼かつ傲慢な和歌を、源氏が長年恋を訴えている朝顔姫君に送るであろうか、というのが大きな疑問となる。この点を問題としてか、諸注釈はさらに次のような解釈を加えている。

一首の底意、あなたが私をばかにするのは勝手だが、ご自身だって、盛りを過ぎているのではないか、という戯れの切り返しを、疑問にも解せるように形をあいまいにしたか。「朝顔」（朝の素顔）」と「見し」で、ありもしなかった情交をあったかのごとくにいう。
（新編日本古典文学全集）

「朝顔」は朝の女の素顔の意でもあり、情交を暗示。ここでは「見し」ともあり、あたかも情交関係があったかのように言い、さらに盛りが衰えたかと大胆に問い、相手の反応をさぐろうとする。
（新日本古典文学大系）

また姥野隆司[8]は、通説のように解釈するが、それが許されるのは、「源氏と朝顔宮両者の関係は一般の恋愛関係とは異なった〈風雅の友〉

として共感的情調を基調とする特異な感情の交流があったため」と論じている。この他、この贈答歌について論ずる論は、後掲の加藤睦の論を除いて、すべて通説のように解しているようだ。

しかしながら、朝顔姫君は、格の高い宮家の姫君で、世間的には光源氏と正式に結婚してもおかしくないとみなされる身分があり、斎院をつとめた神聖かつ高貴の女性である。物語中で六条御息所と対比される形で語られることが多く、六条御息所と並ぶような身分の女性であることを示している。紫上が朝顔姫君と光源氏の結婚の可能性を心配し、「おぼえことに、昔よりやむごとなく聞こえたまふを、御心移りなば、……」と苦悩しているのは、父が逝去したとはいえ、朝顔姫君の社会的地位が高いことを物語る。そのような貴女に対して、間接的にせよ、また長年の交誼があるにせよ、あなたは容貌が衰えたのではないかと聞く無礼な問いかけ、あるいはかつて情交があったかのように言いなした不躾な戯れを言うであろうか。そしていずれの場合でも、そのような意味であったら、朝顔姫君は源氏の無礼さに不快感を示すに違いないが、その気配はなく、姫君の不快感や困惑、不信などは全く記されず、姫君は無礼・侮辱として受け取っていないのである。このことに十分注意すべきではないだろうか。

女性が不快感を示している場面として、椎本巻の例をみてみよう。

つてに見し宿の桜をこの春は霞隔てず折りてかざさむ

と、心をやりてのたまへりけり。あるまじきことかな、と見たまひながら、いとつれづれなるほどに、見どころある御文の、うはべばかりをもて消たじとて、

いづくとか尋ねて折らむ墨染に霞こめたる宿の桜を

匂宮は中君にこの歌を贈り、花を折ってかざしたいという表の意味に、あなたにじかに逢ってわがものにしたいという意を重ね、直截過ぎる比喩でそのままに言い放っている。中君は世間から忘れ去られた落魄した宮家の姫君であり、帝位につくかもしれない匂宮とは身分的・社会的に隔たりがある立場だが、その中君ですら、匂宮の傲慢な言い方に、「あるまじきことかな」と強い不快感を感じ、そっけない歌を返すさまが叙述されている。

また、関係があったかのように男性が言いなす歌に対して、女性が拒否感を示す歌もある。総角巻で、薫が大君に送った歌は、「小夜衣きてなれきとはいはずともかごとばかりはかけずしもあらじ、と、おどしきこえたまへり」、あなたと衣を重ねてなじみかわしたとは言わないが何もなかったわけでもない、と情事はなくとも添い臥したと所有感をちらつかせた。それに対して、大君はすぐさま返歌でそれを否定し、「へだてなき心ばかりは通ふともなれし袖とはかけじとぞ思ふ」と詠んだ。大君は薫の「おどし」を受け入れず、あなたと通い合っているのは心だけである、と明言したのである。

また朝顔姫君と源氏の贈答歌にも、類似の歌がある。賢木巻で、斎院卜定された後、源氏は「かけまくはかしこけれどもそのかみの秋おもほゆる木綿襷かな」と、秋に何かあったかのような歌を送ってきた。[9] 源氏の歌は、情事があったとまでは言っておらず、無礼というほ

どではないが、それでも姫君は「そのかみやいかがはありし」、昔いったい何があったと言うのか、と強く反発して返歌した。以上のことから、朝顔巻の源氏の歌が、どのような意味であれ、無礼なほのめかしであったとは思われない。

そもそも光源氏と朝顔姫君の間には、かつて逢瀬や、朝の顔を見る機会があったと解釈すべきなのだろうか。[10] この賢木巻の姫君の「そのかみや…」の歌はきっぱりと否定しており、この条からだけでも情事などはなかったことが明らかであると思われるが、「朝顔」という言葉に関連する点を見ておく。朝顔姫君が初めて物語で話題となっているのは帚木巻であり、紀伊守邸の女たちが光源氏の噂をしているのを聞き、「ことなることなければ、聞きさしたまひつ。式部卿宮の姫君に朝顔奉りし歌などを、少しほほゆがめて語るも聞こゆ。」とある。この贈答歌は『源氏物語』になく、欠巻の「かがやく日の宮」にあったのではないかという推定（『奥入』など）のもとになる部分だが、その問題はさておき、帚木巻では、光源氏は彼女達がしている自分の噂話を聞き、もしや自分と藤壺とのことが噂されてはいないかと気にしているが、自分と式部卿姫君との噂をしているのは全く気に懸けていない。これが姫君と光源氏との秘めたる出会いや逢瀬にまつわる歌とは思えないし、そもそも朝の顔を詠むような秘めたる逢瀬の歌が、紀伊守邸の女たちのような受領階級の女性たちにまで伝わるはずはない。[11] もしそんな歌が人口に膾炙すれば、桐壺帝の姪にあたる高貴な未婚の姫君にとって恥辱であり、源氏の反応も異なっているだろう。そうではなく、単に朝顔の花をめぐる風雅な恋のやりとりだったのではないか。この歌は、姫君の女房たちの視線と耳にさらされ、女房たちの口を通して流布していった、風雅であるが秘密ではない恋歌として、物語中で繰り返し描かれているのだと思われる。

朝顔姫君とのなれそめや初めての贈答などについては、『源氏物語』は語っていないが、藤壺、六条御息所、花散里の場合も書かれておらず、別に不自然なことではない。むしろ垣間見などから偶然に恋が始まる空蝉、軒端荻、夕顔ら中の品の女と、これらの貴女とがはっきり区別されている証左であろう。

従来、二人の間に逢瀬があった、もしくは源氏が姫君の朝の顔を見たという推定の根拠とされたのは、当該の朝顔巻の歌と、帚木巻のこの条を除いて、あと一つあり、それは前掲の賢木巻の姫君との贈答の後に、「まして朝顔もねびまさりたまへらむかしと、思ひやるもただならず、恐ろしや」とある点である。確かに、「ねびまさりたまへらむかし」という心中が書かれているのは、姫君の姿か顔などを、かつて垣間見したことがあったかと想像させるような記述である。この点から、高田祐彦[12]が「何らかの事情で（たとえば、野分巻の夕霧による紫の上かいま見のような）、源氏が姫君の朝の顔を見たことがあり、それを朝顔の花を贈ることで相手に知らせた。それは、他者からすれば、とりようによっては二人の間に逢瀬があったようにとられるため、世間では二人の間に関係があったように受け止められていた、ということではないだろうか。」と述べている。確かに、「ねびまさりた

まへらむかし」という言は、夕霧の紫上垣間見に似たような、偶然による垣間見があったという可能性を思わせる。しかし源氏が、垣間見したことを朝顔の花を贈ることで相手に知らせた、と考える必要はないのではないか。すでに加藤睦（前掲論文）が高田論に対して「仮に垣間見があったとしても、源氏がそれを宮に知らせるという、配慮に欠けるふるまいに及ぶとは思われない。」と否定している通りであり、そのような無礼なことをする筈がない。つまり、かつてあったかもしれない垣間見と、「朝顔」の歌とは、切り離して考えるべきであろう。垣間見があったとしても朝の顔とは無関係なのである。

「朝顔」という歌語については諸氏の論で述べられ、[13] そこでも指摘されるように、寝起きの朝の顔、つまり逢瀬という使われ方もある。[14] が、そうではない場合も多く、源氏の歌のように「露」と共に詠まれる場合は、はかなさを強く表わす。また『源氏物語』の中で、朝顔斎院だけが朝顔によそえられるのでもない。例えば宿木巻の薫と中君の次の贈答で、「朝顔」は歌の核となる言葉であるが、逢瀬とは無関係である。

よそへてぞ見るべかりける白露の契りかおきし朝顔の花（薫）

消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露はなほぞまされる（中君）

朝顔はすぐにしぼむ花であり、そこに置く露はさらにはかなく消えるものであるゆえに、そのはかなさが愛され、無常を象徴する。このように朝顔は、常に逢瀬のニュアンスを帯びている言葉ではなく、状況・文脈によって全く異なる。

つまり、姫君が噂話で登場した当初から「朝顔」とあることから、源氏と姫君が情交をもったと解釈されることが多いが、朝顔巻の源氏の歌の「朝顔」は、かつて逢瀬があったことを暗示するものではなく、ましてその時に見た姫君の朝の顔でもなく、情交があったかのような戯れた詠みぶりをしているのでもない、と考えられる。

では「帚木」に見える源氏のかつての歌、「式部卿宮の姫君に朝顔奉りし歌」は、どのような場面を想定できるだろうか。たとえば、前掲の宿木巻の贈答では、薫が自邸の庭に下りて自ら朝顔を折り、手に持ったまま二条院へ行き、中君に会い、扇に載せて御簾の中に差し入れ、朝顔の歌を詠みかけて贈答している。また夕顔巻では、六条御息所のもとから光源氏が帰る際、源氏を見送る女房中将君の美しさに源氏が目をとめて、隅の間の高欄に中将をすわらせ、朝顔（これは朝の顔と掛けている）の歌を詠みかけるが、傍らでその贈答を聞いていた侍童が、指貫の裾を露に濡らして、庭の朝顔を折って奉っている。このようなことはよくあったのだろう。そしてここからもわかるように、こうした贈答は周囲にいる人々の耳や目に当然入るわけであり、秘密でもなく、風雅なやりとりとして伝播していく。帚木巻にあるように、世の人々に噂される「式部卿宮の姫君に朝顔奉りし歌」は、そうした歌であったと考えられよう。朝顔巻の源氏の歌に「見し折」とあるので、この過去の場面は光源氏邸ではないだろう。帚木巻以前に、源氏は式部卿宮邸を訪問した折、庭の朝顔を見て、その場で一枝折り

取って、歌とともに姫君に奉るような場面があったのではないかと想像される。[15] そのような場面で詠まれた朝顔の歌が、女房たちを通して世間の人々に伝わっていった、と考えるのが自然ではないか。こうしたことは、当時の読者には説明するまでもない了解事項であったと考えられる。そして具体的な状況は、あえて物語の読者の想像に委ねられているのであろう。

言うまでもないことだが、朝顔に限らず、花や枝を歌とともに御簾中の女性に差し入れる場面は多い。『源氏物語』の賢木巻で、六条御息所を訪れた源氏は、「榊をいささか折りて持たまへりけるをさし入れて」、歌を贈答する。藤袴巻では、「蘭の花のいとおもしろきを持たまへりけるを、御簾のつまよりさし入れて」とあり、夕霧が蘭の花を玉鬘の御簾のつまから差し入れて、歌を詠みかけて言い寄る。また男女ではないが、早蕨巻で、薫が匂宮のもとに参り、その庭の梅の下枝を折って匂宮に進上し、歌を贈答する。歌集や物語にも多くあるが、たとえば『後撰集』一五一には、女の垣根に咲く卯の花を折って歌とともに女に差し入れることが見え、『清輔集』二六六には三条女御（後白河院女御琮子）のもとに参上し、軒先の梅を折って歌とともに女房に差し入れるさまが描かれる。

そして初句「見し折」については、この句が逢瀬をもったことの証左ととらえる場合もあるが、一条天皇への哀傷歌「去年のけふ今宵の月を見し折にかからむものと思ひかけきや」（『栄花物語』ひかげのかづら・八七・行成）や、「見し折の花は匂ひも変らねど人ぞ昔の春となりぬる」（『風葉集』六〇九・皇太后宮）があるように、逢瀬に限る言葉ではなく、むしろ懐旧の念が強く漂う表現である。

以上を総合して考えると、「見し折のつゆ忘られぬ朝顔」は、決して逢瀬をもったことを言うのではなく、姫君の朝の顔でもなく、景の朝顔の花であり、かつて姫君に歌とともに奉った朝顔かと想像される。この二人が逢瀬をもったことはないと断言できよう。

源氏の歌は、「かつて（あなたの邸にうかがった折にご一緒に）見た朝顔の花の美しさは、今も忘れられません。（あなたの邸の）朝顔はもうその盛りが過ぎてしまったでしょうか。（ご覧のように、私の邸の朝顔はこのように色あせて咲いているだけですが。）」という意であると考える。

すると、「花の盛りは過ぎやしぬらむ」の部分は、現行の注釈がみな述べる如く、姫君の容貌の衰えを暗に言う、と解釈して良いのだろうか。上句が姫君のことをさすものではないなら、下句も無関係となりそうだが、改めて下句の表現自体から考えたい。

三　「花の盛りは過ぎやしぬらむ」をめぐって

結論を先に述べると、和歌の表現史から、この「花の盛りは過ぎやしぬらむ」が女の美貌の衰えをさして言う言葉とは考えられない。現代では、花の盛りが過ぎたと言う表現が、女性の容貌の衰えをあらわすことはあるが、平安期の和歌では基本的に、景物の花の盛りが過ぎたことを純粋に惜しむ心を詠むことが殆どである。平安和歌で「花」

のような女の容貌が衰えたことは、小野小町の「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」（『古今集』春下・一一三）のように、「色」が「うつる」「うつろふ」等と言うことが多い。また同じく小町の「今はとて我が身時雨にふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり」（『古今集』恋五・七八二）を嚆矢とし、「身」が「ふる」（古る）[16]とも詠まれる。いずれにしても女が自分自身を言うものであり、男が女に向かって言う表現ではない。そして、贈答歌で女が自分を「うつる」「ふる」と言っても、男は返歌で決して同調しない。

『蜻蛉日記』上巻で、道綱母は夫兼家の夜離れを嘆き、自分の容貌の衰えを重ねて、「わが宿のなげきの下葉色深くうつろひにけりながめふるまに」と詠ずる。ここでも「うつろふ」と詠まれている。その歌を聞いた兼家は、決してそれには同調したりはせず、「折ならで色づきにけるもみぢ葉は時にあひてぞ色まさりける」と詠み、逆に「色まさりける」と道綱母の美しさを賛美するのである。

「花の盛り」は春秋の花に対して詠まれるが、それが「過ぎ」「過ぐ」を詠む歌は、文字通り景物の花の盛りが過ぎたこと、そしてそれへの哀惜を詠むものが多い。

はかなくて春ひと春は過ぎにけり花の盛りはすぎがてにせよ
（『古今和歌六帖』五一）

花の盛りにふるさとの花をおもひやりて、いひやりし
見ても又またも見みまくのほしかりし花の盛りは過ぎやしにけむ
（『高光集』三七）

後者は高光出家後の詠とみられる。『源氏物語』の朝顔巻など三巻に多武峰少将高光の和歌・説話が影響を与えたことは、清水婦久子[17]が論じている。その中で、この『高光集』三七がふまえられており、「ふるさと」は高光がかつて住んだ桃園邸をさす可能性を指摘し、『源氏物語』の朝顔姫君の桃園邸と重ねていることを論ずる。するとますます、高光歌と重ねられた当該歌の「花の盛りは過ぎやしぬらむ」が表すのは、哀惜・懐旧以外にはあり得ないであろう。

ただし、「花の盛り」が「過ぎ」「過ぐ」という表現を用いて、女性の容貌のうつろい・年齢による変化を言うものは、若干であるがみられる。『躬恒集』に「いかで我が折らむとおもひし山吹の花の盛りの過ぎにけるかな」（三九七）があり、春の歌であるが、第二句に「あはむとおもひし」という異文が存在するので、この歌が暗に女性の容貌をたとえる可能性も排除できない。また平安末の例であるが、藤原隆信の「絶久恋といへる心をよめる／人知れずむすびそめてし若草の花の盛りもすぎやしぬらん」（千載集・恋四・八八八）がある。しかしこれは題詠であり、具体的な場面性はないが独詠のふうである。こうした詠み方は例外的で、これ以降に踏襲されていない。

つまり「花の盛りは過ぎやしぬらむ」は、基本的に哀惜・懐旧の表現であり、女の容貌の衰えを重ねて言う例はわずかであり、それも独詠歌である。そして女の容貌の衰えを、男が、目の前にいる女・手紙を送る女に向かって詠みかけることは全くない。『源氏物語』の場合、女は高貴な前斎院であり、いかに光源氏であっても、朝顔姫君に対し

て彼女の容貌の衰えを言うことは、まずあり得ないのである。

当該の朝顔巻の贈答歌の前の場面で、源氏は故式部卿宮邸を訪問した折に、姫君の方の庭に目をやり、「あなたの御前を見やりたまへば、枯れ枯れなる前栽の心ばへもことに見わたされて」とある。源氏邸の朝顔はわずかに咲いているだけであるが、姫君の邸の前栽も枯れ枯れであることを、源氏はこのように見て取っている。けれども、朝顔は日の光にすぐにしぼむ花であるが、一方で「かれぬとは日ごとにみれど朝顔の花の盛りぞ久しかりける」（『東撰和歌六帖』二三二・真昭）、「朝顔の朝露ごとにひらくれば秋は久しき花とこそみれ」（『恋路ゆかしき大将』二三）等のように、秋の間長く咲き続ける特徴があり、歌にも詠まれる。ゆえに源氏は、故式部卿宮邸の朝顔について、「花の盛りは過ぎやしぬらむ」とあえて尋ねているのであろう。

では「花の盛りは過ぎやしぬらむ」は、こうした自然の景に、人事の何を重ねているのであろうか。おそらくそれは、二人の間に過ぎ去った時間の長さ、遠く過ぎ去った青春の時間を言うものではないだろうか。なぜなら、続く源氏の消息文に「年ごろのつもりも、あはれとばかりは、さりともおぼし知るらむや、となむ、かつは」と書かれており、歌の意図を説明するかのように、自分の愛が長い年月にかけて続いていることを殊更に訴えているからである。こうした文は、和歌を補完する機能をもつものと考えられる。

この朝顔巻全体が懐旧・回顧に彩られていることは諸氏の指摘があり、光源氏自身の若くはない年齢の自覚・感懐が繰り返し語られている。姥澤隆司（前掲）は回顧と哀傷の情調を読み取り、加藤睦は「花の盛りは過ぎやしぬらん」に「長い年月の経過を振り返る懐旧の思いが託されている」とし、懐旧歌として位置づけており、[18] 首肯される。また木村祐子（前掲）は、「源氏の歌は、礼を失したとの感があることは否めない」とするが、一方で「「朝顔の花のさかりは過ぎやしぬらむ」―青春時代は儚く過ぎ去ってしまったのだろうか―とは、宮ばかりではなく彼とも無縁の言葉ではありえない」とし、「朝顔巻の主題は源氏の青春時代の終焉」とする。これら諸論における歌の解釈は私見とは異なるが、この句が過ぎ去った青春・時間を詠嘆するものと考える点は首肯すべきと思われる。

この朝顔巻の贈答では、姫君自身が、返しの消息の歌と文で初めて色あせた朝顔を自分になぞらえたのではないだろうか。[19] もしも源氏の贈歌の「朝顔」が自分であることがすでに自明のことならば、改めて「似つかわしき御よそへにつけても、露けく。」とわざわざ繰り返して書くことはないであろう。おそらくこれは、贈答歌の方法である転換による切り返しであり、姫君はここで初めて、相手の言葉を利用して「朝顔の花の盛りは過ぎやしぬらむ」が自分への言葉であると故意に曲解してみせ、返しで「あるかなきかにうつる朝顔」、色あせてわずかに咲く朝顔は、まさに自分のことであると言って、切り返したのだと考えられる。ここではやはり「うつる」という歌語が使われており、「うつる」がまさしく意味するように、姫君は、若さが失われてさだ過ぎた自分を投影している。[20] また「あるかなきか」は、例えば「心ち

例ならずおぼされける頃よみ給ける／よそにみし尾花が末の白露はあるかなきかの我が身なりけり」（『詞花集』雑下・三五五・円融天皇中宮遵子）、「朝顔の花に空蝉のつきたるを、人のがりやるとて／空蝉の心とどめぬ世の中にあるかなきかの朝顔の花」（『肥後集』二〇四）のような類歌があり、ここでは自身が父を喪い、社会的にもあるかなきかの存在であることを表出しているのではないだろうか。

朝顔の歌から十五年という長い歳月が流れ、その間に二人の青春の日々は過ぎ去り[21]、源氏は色々な恋、流離、帰京、そして栄華に到る今があり、姫君のほうは斎院となって神に仕え、八年後に父宮の死とともに斎院を退下するなど、多くのできごとがあった。しかし、その間も源氏はかつての朝顔の花の美しい景を忘れず、二人の間に流れた時間の長さと自分の愛の永続性を、今なおあざやかに残る朝顔の記憶に重ねて訴えた。それは「おとなびたる御文の心ばへに、おぼつかなからむも見知らぬやうにや、」とあるように、穏やかで円熟した表現であり、いつもは冷淡な姫君の心を動かし、返歌をさせるのである。これが、かつてあなたの朝の顔を見たけれど、あなたはもう花の盛りを過ぎたのでしょうか、というような無礼極まりない贈歌のはずはなく、それは「おとなびたる御文の心ばへ」と決定的に矛盾してしまう。この源氏の歌はあくまでも礼儀正しく丁寧なものであると理解すべきであろう。

姫君の返歌は、「（おっしゃる通り花の盛りは過ぎ）秋も終わって、（私の邸の）霧のたちこめる垣根にからみついている朝顔は、もうあるかなきかに咲いて色あせています」という、特に新たな趣向を凝らしているわけでもない、淡々とした返歌である。そして、「似つかわしき御よそへにつけても、露けく。」という言葉を添えて歌意を説明し、ここで初めて、色あせた朝顔はまさしく自分であるととりなしたのである。返しの方法として常套的な、意識的な曲解による切り返しである。この「あるかなきかにうつる朝顔」は、さだ過ぎた自分、社会的にもあるかなきかの存在の自分を形象している。だがこうした自己把握は、姫君自身にとっては自虐でも卑下でもなく、姫君の基本的な姿勢である。ここにこの朝顔姫君の特異な人物造型と、光源氏との精神的断裂が、象徴的に示されている。

四　無礼・傲慢があらわれるとき　―玉鬘など―

以上のように、この朝顔の贈答は、従来の解釈とは異なり、光源氏の歌は決して無礼なものではないことが確認できたが、光源氏は常にこのように女性に礼儀正しいわけではない。源氏は、朝顔姫君のような高貴な身分ではない、いわゆる女房階層の女性たちには、時としてかなり傲慢な態度を露わにし、無礼な言葉を投げかけている。いくつか例をあげてみよう。

軒端荻が、蔵人少将を通わせていると聞いた源氏は、歌を贈る。

ほのかにも軒端の荻をむすばずは露のかごとを何にかけまし　（夕顔巻）

源氏は、偶然に関係に持った軒端荻に、執着しているわけではなく、結婚した女の様子に対して好奇心をもっているに過ぎない。それなのにこの歌では、契りを結んだことをわざわざ「軒端の荻をむすばずは」と言葉に出して言い、まるで所有感を見せつけているような表現である。しかもそのようなあらわな意味のこの歌を、もし使者がひそかに届けるのに失敗して少将が見つけても、相手が自分なら少将は許してくれるだろう、という驕った心が書かれている。

また、若紫巻で、光源氏が若紫邸からの帰る時、恋人との一夜ではないので「さうざうしく思ひおはす」という欲求不満の気分の帰途、以前に愛人であった女の家の前をたまたま通りかかり、その女の家であることを思い出して、門を叩くが、女は門を開けない。

朝ぼらけ霧立つ空のまよひにも行き過ぎがたき妹が門かな

門外から随身にこの歌を歌わせるが、これはあなたのことを忘れずに思慕していたというような恋歌ではない。霧に迷う中で偶々通りかかったけれど行き過ぎ難いです（寄っても良いですか）、というような、傲慢さの匂う言葉づかいである。そして女に拒否されてしまう。

葵巻では、葵祭の日に源氏の車に詠みかけてきた源典侍に対しては、「かざしける心ぞあだに思ほゆる八十氏人になべてあふひを」（葵巻）と、あからさまにその好色心を咎めるような言い方をしており、明らかに源典侍を見下した姿勢が見える。

光源氏だけではない。先にあげた、椎本巻の匂宮から中君への歌、また総角巻の薫から大君への歌にも、かなり無礼なものがあり、明らかに最高身分の女性への贈歌には使われないような表現を含んでいる。大君・中君は女房階層ではないが、権勢とは無縁の落魄した宮家の姫君であり、場合によっては女房階層へ転落するかもしれないような弱い立場である。[22] 薫はこの姫君達に対して社会的・経済的支援をする後援者という立場にあり、控えめながら、どこか強者の意識が見え隠れしているようだ。

特に、光源氏から玉鬘への歌には、同様の意識が色濃く見られる。たとえば「うちとけてねも見ぬものを若草のことあり顔にむすぼほるらむ／幼くこそものしたまひけれ」（胡蝶巻）には、源氏の所有者的な姿勢があらわであり、玉鬘が返歌を拒否したのも当然だが、ここでは野分巻にある、玉鬘が自分を女郎花にたとえて源氏に歌を詠みかけ、源氏が返歌した贈答を見てみよう。

吹き乱る風のけしきに女郎花しをれしぬべき心地こそすれ（玉鬘）

下露になびかましかば女郎花荒き風にはしをれざらまし（光源氏）

玉鬘は養父の源氏が言い寄るのをかわそうとし、自分を卑下して女郎花にたとえ、吹き乱れる風のように横暴なあなたのふるまいに、私は翻弄され、しおれて死んでしまいそうに苦しい、と訴える。

「女郎花」は、「名にめでて折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな」（『古今集』秋下・二二六・遍昭）に代表されるように、美しくあだなる女性、その女性との恋の戯れを表象する言葉であり、平安前期を最盛期として、しばしば用いられた。[23]

近藤みゆきは、『源氏物語』の和歌を、『古今集』の歌ことばのジェ

ンダー規範と総合的に照らし合わせ、脱規範的側面から、作者が物語の虚構の男女をどのように描き分けたか、精細な検証を行った。そして、「物語の中核を担う女の命がゆらぐ時、あるいは、源氏、夕霧、薫といった男性主人公がその欲望をむき出しにした時、まさにそれらにあらがう場面で、女の歌の「ことば」は、規範を超えて特殊なゆらぎを見せるのである」という、的確で興味深い指摘を行っている。「女郎花」は男性に偏る言葉であるが、それが使われる前掲の玉鬘の歌、後掲の一条御息所の歌も、男性の欲望やその横暴さにあらがう時の歌であると読み解いている。また小山香織[24]は、『源氏物語』における「女郎花」は、『古今集』以来の浮気な女性を連想させる花という以上に、「そのように男性から見られざるを得ない、女の身の生き難さを示すことば」とし、首肯される。

つまり、「女郎花」は主に男性によって詠まれるが、貴族女性に真剣に思いを訴える時に相手を賛美し喩えて使う言葉ではない。藤壺、六条御息所、紫上、朝顔姫君、朧月夜のような貴女に、源氏が恋慕を訴える際には決して使われない表現である。夕霧巻で、娘落葉宮と夕霧の一夜の関係を誤解した一条御息所が、あえて娘を女郎花に喩える卑下した言い方で、「女郎花しをるる野辺をいづことて一夜ばかりの宿を借りけむ」という、強い詰問の歌を夕霧に詠む。しかし夕霧はこの「女郎花」という言葉は繰り返さないで返歌しており[25]、それは「女郎花」という言葉が発する語感を避けたのだと思われる。相手は自分が恋する落葉宮の母であり、御息所という高貴な身分の女性であるから、当然の配慮であろう。

しかし源氏は、前掲の返歌で玉鬘が「女郎花」であることを否定するどころか、「女郎花」を繰り返し、下葉の露のように密かな私の思いに靡いてくれれば、女郎花は激しい風にしおれて苦しんだりしないでしょうに、と言う。「女郎花」と「露」は夫婦の関係にあるとされ（『拾遺集』秋・一六〇など）、そのように自分をわざわざ「下露」にたとえる関係性を返歌に持ち込み、さらに「なよ竹を見たまへかし」、折れずに撓むなよ竹のように柔軟になったらどうか、という意の言葉を添える。この源氏の歌と言葉には、玉鬘への支配的な意識があらわである。草子地で語り手が、源氏の言に対して「ひが耳にやありけむ、聞きよくもあらずぞ」、聞き苦しいことだと批判するのは、歌の不出来ではなく、そこに漂う強者の驕った口調に対する不快感を、読者に語って見せる行為ではないか。

光源氏は他人に対して丁寧で配慮ある人物であるとされることが多い。それは、傍若無人に振る舞う匂宮などに比べれば、その通りなのだが、やはり光源氏の場合も、身分関係・人物関係によって、態度のみならず詠歌の姿勢・表現も大きく異なっているのである。

権力をもつ上流貴族から女性に対して歌を詠む時、歌を贈る相手が、身分の高い貴女なのか、女房階層の女性なのか、自分と相手との身分関係がどうなのかは、詠歌の姿勢と言葉とを左右していると言えよう。和歌には基本的に敬語がなく、時には身分を超越し、心と心が

響き合うコミュニケーションが可能になる。しかし一方では逆に、敬語という形では和歌にあらわれない身分関係・人間関係が、詠者の言葉使いや詠歌姿勢に反映されていることも確かであろう。特に、物語に仕組まれた贈答歌に対しては、物語作者の叙述の意図を読み解く上で、こうした身分構造への注視が欠かせないと考えられる。

注（1）以下、『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集』（小学館）により、句読、漢字、改行等の表記は私意による。また『源氏物語大成』（中央公論社）によって異文を確認し、必要に応じて示した。ここでは「かつは」の部分に異同があり、青表紙本系では「かつは」「かつ」、河内本では「よろづを」、御物本（東山御文庫蔵本）では「よろづのつみを」、陽明文庫本では「よろづは」であり、本文にかなり揺れが見られるので、「かつは」は除いて解釈する。

（2）本文は玉上琢彌編『紫明抄 河海抄』（角川書店、一九六八年）によるが、句読・清濁等の表記は私意による。

（3）この解釈の可能性もあるが、源氏は既に消息で「思ひたまへおこたらずながら…」と言っているので、重複するという感もある。

（4）本文は中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊』第二巻（武蔵野書院、一九七八年）によるが、句読・清濁等の表記は私意による。

（5）なお、岩波文庫『源氏物語』（二）（二〇一七年）では、「これにも」を「たれにも」とし、「どなたが見てもよいように」と注する。

（6）なお『花鳥余情』では、この歌に「式部卿の姫君に朝顔たてまつりし事は帚木の巻に見えたり。それをみし折の露忘れぬとはよみ侍る也」と記し、特に姫君の容貌の衰えとは解していない。

（7）この点を問題とし、玉上琢弥（『源氏物語評釈 四』角川書店、一九八〇年）は反語と解釈するが、反語と取るのは無理がある。

（8）「哀傷と交情の構図―朝顔巻の光源氏と朝顔宮―」（『帯広大谷短期大学紀要』二三、一九八六年三月）。

（9）物語はここで「なれなれしげに」と記し、源氏が何もなかったことを事あり顔に言うことに、読者に注意を喚起している。

（10）鈴木日出男はかつて一度だけ情交があったとするが（「朝顔・夕顔」『源氏物語歳時記』東京大学出版会、一九八九年）、原岡文子『源氏物語の人物と表現―その両義的展開―』（翰林書房、二〇〇三年）はそれに疑義を呈している。その後も両説あるが、木村祐子「朝顔の花のさかり―源氏物語「朝顔」巻の主題―」（『国語と国文学』二〇〇四年四月）は、姫君が斎院に卜定されたこと等などから、「実事はなかったということを広く世間に知られていた」とする。加藤睦「『源氏物語』の和歌を読む（三）―朝顔の花をめぐる贈答歌―」（『立教大学大学院日本文学論叢』一〇、二〇一〇年八月）も、姫君の心境の描写などから「宮の一貫した拒否の姿勢が看取されるので、二人の間に逢瀬があったとは考えられない。」と述べている。

（11）また賢木巻で、光源氏と朧月夜の密会を見つけた右大臣が、弘徽殿大后に事の次第を訴えている中で、「斎院をもなほ聞こえ犯しつつ、忍びに御文通はしなどして、けしきあることなど、人の語りはべりし」と述べ、斎院となった神聖なる朝顔姫君に光源氏がなお言い寄っていることを問題視している。右大臣はこうした情報を早く入手できる立場にあるが、朝顔姫君と光源氏が逢瀬を持ち後朝の歌をかわしたなどとは言っていない。『源氏物語』作者はこの二人が情交をもったと示唆していないことは明らかである。

（12）『源氏物語の文学史』（東京大学出版会、二〇〇三年）。

（13）原岡文子（前掲書）、越野優子「喩としての朝顔―源氏物語の朝顔の姫君を中心に―」（『中古文学』一九九七年五月）、その他。

（14）逢瀬を暗示する用法では、「折る」「うちとけ」「ねくたれ」「おもかげ」など、情交のイメージの語が共に使われることが多い。

（15）偶然の垣間見はこの時であった可能性もある。賢木巻の源氏の歌に「そのかみの秋おもほゆる」とあり、季節が一致しているからである。なお、空蝉巻に「かくうちとけたる人のありさま垣間見などは、まだ

したまはざりつることなれば」とあるのはこの後にあたるが、女性の日常の姿を自分から垣間見する行動は初めてという意であり、訪問した貴女を偶然に目にするような垣間見とは異なるものであろう。

(16) 「身」が「ふる」という表現については、室田知香「「ふる」と「なる」―恋の時間・結婚の時間」(『国語国文』八七―四、二〇一八年四月)で詳しく論じられている。

(17) 『源氏物語の巻名と和歌―物語生成論へ―』(和泉書院、二〇一四年)、「源氏物語の巻名・和歌と登場人物―歌から物語へ―」(『源氏物語とポエジー』(青簡舎、二〇一五年)。

(18) 加藤睦は「昔を懐かしむ歌であるとともに、衰えを嘆く歌」で、「朝顔宮ではなく、源氏自身の衰えである」とする。しかしその場合、三四句の連接がやや不自然に思えることと、源氏が自身の衰えを殊更に歌で姫君に訴える意図が不明に思われ、私見とは異なる。

(19) 『源氏物語』では葵巻以降、「朝顔の姫君」「朝顔の宮」などと呼ばれるのは、帚木巻で話題にされている朝顔の歌(歌は不明)に基づく物語中の呼称であり、姫君自身は知らぬことである。会話文では「斎院」(『帚木』右大臣の言葉)、「前斎院」(『若菜上』乳母の言葉)、「斎院」(『若菜下』源氏の言葉)と呼ばれている。

(20) 同じ朝顔巻で、姫君は自身のことを「世の末に、さだ過ぎ、つきなきほどにて」と思い、また梅が枝巻で薫物を送る時、「散り過ぎたる梅の枝」に文をつけ、和歌は「花の香は散りにし枝にとまらねどうつらむ袖に浅くしまめや」と詠み、自身を「散りにし枝」と寓し、再びさだ過ぎた自分を景に重ねて詠じている。

(21) 朝顔姫君は前述のようにさだ過ぎた自分を自覚するとともに、源氏と自分のことを「昔、我も人も若やかに…」と回顧している。

(22) 同様の身分の例では、式部卿宮(光源氏・八宮の異父兄弟)の姫君は、大切に養育されたが、父没後に境遇が変化し、宮の君と呼ばれる上臈女房になっている(蜻蛉巻)。なおこれは『源氏物語』成立当時、道長・彰子らが、道長一族以外の最上層階級の貴女を、いわゆる高貴の女房として、道長一族の中宮・皇后に出仕させたことの反映とみられる。

(23) 『王朝和歌研究の方法』(笠間書院、二〇一五年)参照。

(24) 「『源氏物語』の女郎花―玉鬘の詠歌を起点として―」(『むらさき』二〇〇四年一二月)。

(25) 夕霧の返歌は「秋の野の草のしげみは分けしかど仮寝の枕むすびやはせし」であり、「女郎花」ではなく「秋の野の草のしげみ」と言い換え、何もなかったのだと釈明する。しかし返歌が雲井雁の妨害で大幅に遅れ、一条御息所は懊悩して、病が悪化し死に到る。